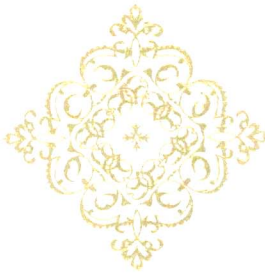


A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

46

ガッダ

悲しみの認識　　千種堅訳

モラヴィア

無関心な人びと　　米川良夫訳

中央公論社

新集 世界の文学 46 ©1970

ガッダ
モラヴィア

訳者 千種 堅
米川良夫

LA COGNIZIONE DEL DOLORE
by Carlo Emilio Gadda
Originally copyrighted by Giulio
Einaudi Editore spa., Turin.
The translation right arranged through
Italia Shobo Co., Ltd., Tokyo.

昭和45年3月25日 初版印刷
昭和45年4月5日 初版発行

発行者 山越 豊

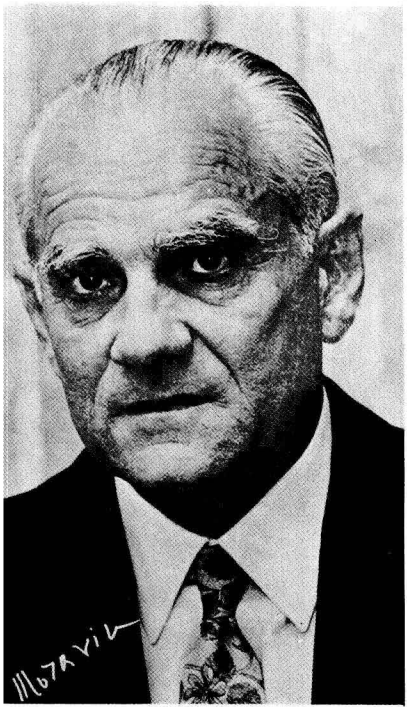
本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

ミラノの市街　ガッダが生まれ、後に教師としての一時期を送ったミラノは、中世以来イタリア経済の中心として繁栄を続けてきた。『悲しみの認識』の主要な舞台の一つとなったのもこの街である。（撮影・井上宗和）

ガッダ



モラヴィア

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

目次

ガッダ　悲しみの認識　3
モラヴィア　無関心な人びと　161
解説　456
年譜　495

悲しみの認識

第一部

一

一九二五年から一九三三年にかけての数年間、さして資源にめぐまれていないこの国マラダガル（イタリアを諷刺して描いた想像上国）のきまりでは、〈地区別の夜警団〉に加入するしないは農村の地主たち本人の自由とされていた。それは地主たちがすでに租税を負担しているばかりか、幾重にも重なる分担金までいろいろ負わされている事実を考慮に入れてのことである。なにしろその総額は時によっては この田舎の土地がセレス（ローマ神話、農業の女神）とパーレ（古代ローマの女神、牧羊をつかさどる）の同意を得て、うるう年ごとに作り出すようになったわずかばかりのバンザヴォイス（しの一種）の売上げに達するばかりか、それをしのぐまでになっていたのである。うるう年ごとといっても、それは旱魃とはみとめられないにせよ、種まきどきにまた刈入れどきにいっこうに雨がふらず、それでいて病気が大挙してやってくるわけでもない、そういう四年に一度の年である。ほかの何にもまして恐れられているのは、どうしても避けるわけにはいかないカッタネオの《バンザヴォイスのベト病菌》である。これにかかると、その植物は無残にもかんじんの生育期間である何ヵ月かの間に、根も茎も枯れて粉になる。そして、樫材の梁に木食い虫や錐がのこしていくのにも似たあの細かい粉を、絶望し飢えた人びとの手に穀粒のかわりにのこしていく。地域によっては、さらに雹についても考慮しなければならない。とはいえ、この風土にふさわしい甘ったるいとうもろこしの一種であるバンザヴォイスの皮をかむったままの穂が、特にこの雹の災難にさらされているということではない。天候というか空というか、とにかくところによってはあの忘れがたきわれらがブリアンツァ（北イタリアの別荘地。この作品の舞台のモデル）の半区画（一ペルチカは約六百平方メートル）の耕地がいくつも並ぶ、その上にかかった空と同じぐらい雹を降らせる。それにしてもブリアンツァという土地はずいぶん細かいところまで測り分けられているではないか。

マラダガルは周知のとおりパラパガルとの激しい戦争の末、一九二四年に独立したのである。この隣国パラパガルには、十七世紀初頭、何十年かの間にヨーロッパからはるばる移民してきた同じ種族出身の住民がいる。これまた知られているところである。再征服をまぬがれ、今世紀まで、このラジオの喧噪の時代まで生きのびてき

た少数のインディオたちは、部族単位で、それもまとまった人数で遠方の領域に住んでいるが、そのため霊兵隊から遠く離れていられたものの、宿痾の結核とこれまた宿痾の梅毒におかされていた。そのうちあるものは、ピエモンテ出身のさる宣教師のねばり強いはたらきでどうにかこうにか「キリストへの信仰」菜園へつれてこられた。ところが、その後はそこから時おり姿を消していった。これはカーニャ（焼酒に似た地酒）を飲むという彼らのまったく悲しむべき習性が原因で、飲んだあと一両日というもの道端で小石のようにころがっているのである。このふたつの国のどちらもが、戦いに勝ったのはわがほうだと主張し、恐ろしい戦争責任をたがいに相手に押しつけている。そこで、一九二四年以降というものマラダガルにもパラパガルにも復員兵がいて、そのあるものは功績ある傷痍軍人にかぞえられていたし、いまなおその状態がつづいている。ぴっこをひいているものがあれば、顔に傷あとがあったり、関節の動かないものもあり、片足、片目のないものもいた。マラダガルやパラパガルのぞっとするほど不潔なカフェで、ガラスの目玉でじっと見つめられるということも珍しくはない。復員兵のなかには外見はそんなふうでなくても、よく見れば実は負傷しているのだとわかる場合があった。だが、傷あとが服にかくれて見えないと、当然うけてしかるべき賞讃も得られない。そのほか、戦争で耳の聞こえなくなった人たちもいた。

原因や由来をあらわす前置詞の di（マラダガル語の de）が、あとに《戦争》という名詞をしたがえ、まえに《役に立たなくなったもの》《不具になったもの》《目の見えなくなったもの》《耳の聞こえなくなったもの》《そこなわれたもの》など、これに類する名詞化した形容詞がつくと、はっきりそうだというわけではないが、何か滑稽な感じをさそうことさえあったという。これはそのとおりである。とはいえ、別に有害でもないので、法律によって禁じられているほどではない。ただあいにくなことに、口の軽い日常生活では、時として謙遜と上品を旨とする聖なる戒律からはみ出ることもある。そういう次第でコルディッレラのとっつきの斜面にあたるテレパットラでは、テレパットラ娘たちが、少々手の早すぎるきらいのあるおめかし男に《戦争ぼけ！》と悪態をついたりするが、ものの十分もふくれっ面をしたあとでは、それを許し、仲なおりすることで片がつく。これはマラダガルの全権委員たちがパラパガルの全権委員たちを相手にやったのとそっくり同じことである。

《ぼけ》とはつまり、マラダガル語ではCがひとつしかついていない《mocoso》であり、したがって、文字どおりの言いまわしだと、《¡Mocoso de guerra!》となる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

それはさておき、いま、〈夜警団〉の警備員の登録に関連して、あの栄光ある負傷兵たち、とはいっても業務に適任とみなされた場合にかぎるのはむろんであるが、その負傷兵たちを員数からはずさずに、復員兵全員におしなべてこの資格が与えられるべきか否かが討議されたのである。いわんとするところは、体力的にいぜんとして役に立つかどうかということである、つまり武器をたずさえた侵入者を調べるような任務を果たしうるだけの力倆があるかどうかが問題とされたのだ。そればかりかこの警備員には、無法者を説得して最寄りの夜警団詰所へついて来させるためにも、ある程度のたくましさと、それにともなう威厳が求められる。もっともある種の連中はうしろより前を歩かせたほうがよいことを考えれば、ついてこさせるというより追いたてるといったほうがよい。

チーズのかけらほどの背丈の警備員がマラダガルにいるのは事実である。しかしトスカナふうのこの凝った表現をまつまでもなく、これは原則というより例外なのだ。それにたとえ小柄ではあっても、時には意外な力を発揮することも考えられる。とはいっても、本物の人なみはずれた小人、それにせむしだけは、昼夜をとわず、警備からもまた大かたの公募からもきびしく除かれている。警備員のもうひとつの特質はあやしい物音、たとえていえばある別荘の一階のモザイク床にふたり組の泥棒の布靴がこすれる音とか、いうまでもないが、その別荘のなかで夜半に銀のフォークが袋に落ちるチャリンという音などを鋭敏に聞きとれることである。理論的にいえば、警備員、つまり注意ぶかい男はえりぬきの耳をそなえ、五感のすべてが完全な状態になければいけないはずである。つまり警察犬の嗅覚と、よくいわれるように穴蔵の暗がりでも走っている鼠を見分けられるだけの猫の網膜を自分のものとしていなければならない。つんぼや半分つんぼの見張りなどとうてい考えられないし、事実マラダガルでも、そして戦後においてさえも、そういうものはとうてい考えられなかった。ところが集団の組織というものはおそらく世界のどこでもある程度はそうであろうが、とりわけほかのどこよりもここマラダガルでは、細胞の永続的なはたらきがよって立つあの究極的な目的を失念するという好都合な気分になることがあり、それも時おり見られるのである。そういうとき組織の緊密さのなかに例外という情愛のあるほころびができる。倫理的究極性と人類に対する血肉の愛情がたがいに相反する呼びかけをしてくる。後者に理屈があれば新しい一連の事態が始まり、目的論の柱から若芽として芽をふき枝となるのだ。

〈夜警団〉に戦争で耳の聞こえなくなった人びとを任命

する点については、なお疑問とする向きが多かった。当事者や局外者が傷痍者の条件について法に根拠を求めるのがふさわしいのではないかとした若干の異論も、当の法自体によって、それには疑義ありとする別の異論にぶつかり、打切りとなった。テレパットラでは良しとされ、パストルファスィオ（ミラノを諷刺的に描いた想像上の都市）では否とされた。明快な判決を下せるような事例にぶつかりながら、このふたつの裁判所は司法官たちが寝食を忘れて作成した入念な判決文で、相反する申しわたしをしたこともあるぐらいだ。つまり事例、事例に応じて異なった意見、あるいは意見の不一致を明らかにすべきだと考えたのである。そこで最高裁にまわされ、訴えられ、それがまた戻されて新しく審査されるというふうに永遠につづいていく。角のたばこ屋の大安売（バッファ）りなみではないか。それにまったく異様な事態があれこれ起こったのである。それもひとえに賛否投票の仕組みのせいではなかろうか。帰するところ、無能、無価値な連中の委任状であり、発言権だけは人なみなのである。これはほぼ南アメリカ全土にみられる民主主義的、共和主義的慣習のなかでも、最も妥当と呼びにくい特質と、最も手におえない特質の間に置かれるべきものである。たとえばジーゴ＝ザーゴ地方では一九二六年に自転車でまわる夜警が任命され、延長二キロにわたる地域を見まわることとなった。実のところ、泥棒にはほとんどぶつからなかったが、泥棒たちにしてもこのあたりでは切り株をのぞけば何も盗むものがなかったのである。ところでこの男は気の毒に片脚が曲がらなかったが、うまいぐあいにそれを戦争で曲がらなくなった脚ということで通していた。もっとも本当のところ、おそらく直接ではないだろうが梅毒から来たもののようで、膝の関節硬直だったのである。丈夫なほうの脚で踏めるよう、右にひとつしかペダルのついていない自転車を使った。その反対側、いうなれば左舷のほうは舷側のタラップのようにまっすぐ垂れた左脚をぶらぶらさせていた。神話では、そしてこの地方の言いつたえでは、その後しばらくしてペダルを踏まないまっすぐなその脚がそっくりアルミの脚になったという。鶏泥棒の事件があったとき、みんなはこういった。「まあね、鶏泥棒じゃね」そしてもっと深刻な事態が起こったときもみんなはこういった。「あの男もかわいそうだね、郡を半分も見まわらなくちゃならないんだ。それもあのアルミの脚でさ」「かみさんや息子たちもいることだし」というものもいた。また、肩をすくめて、「生きているんだ、生かしといてやるさ」というものもいた。マラダガルには結構な方がたがおみえになるものである。

それからセッルチョン山の近辺のルコネス（ガッダが青少年時代を送ったロンゴーネをモデルにしている）でいかにも田舎じみたちょっとしたス

VIERI VAGNETTI

キャンダルが起こった。この村はノヴォコミ地方にある。ルコネスというのは、oficina de correos（郵便局）、電話局、産婆、たばこ、診療所の医師、金獅子（きんし）ホテル、共同洗濯場、それにもちろん教区の教会などがそろっている村である。プラードの駅とポプラ並木から一路、イグレジアに通じる自動車国道が曲がりくねりながら村を走っている。プラードは〈鉄道〉でノヴォコミにもパストルファスィオにも連絡している。鉄道はさらにカベーサまで伸び（あいもかわらぬ単線）、そこでは四十男が赤線入りの制帽をかぶって汽車があえいで来るのを待ちうけている。この地方で最も活気のある都会、パストルファスィオは西部と南部の近郊地帯に君臨しているが、その地帯というのが、ちょうどあのプラードを緑野にとざして並ぶ堆石（たいせき）の外側、約百キロにわたってひろがり、泥にまみれ、かなり不潔なところなのである。

セッルチョンは最も起伏の目立つ姿で近隣の地帯に名前が通っているが、これは山岳性の長いスロープで全面に三角形やとんがりが突出し、まるで恐龍の威嚇的な尻の感じだ。そうしたとんがりの部分が急角度に上ったり下ったりして、風の通る口、通る門戸になっているのをのぞけば、概して水平な高地の形である。切り立った灰色の絶壁が暗い傾斜をのぞかせて、牧歌的な景色へと下りて行く。そして、冷たい影が夜明けの光にのまれながらも、なおひんやりと余韻をのこして、めぐり来たった朝の気配が立ちこめたままでいる塔の間の峡谷。やがて、黒い頂の背後から突如として太陽が輝き出す。その光線が尾根の割れ目で砕け、そこを越えるとプラードへひろがって行き、下って地上の濃霧を黄金（こがね）色に染め、どんよりした湖の間に丘陵地帯が浮かびあがる。その地名のせいで、というよりもその情景からしてどことなくマンゾーニのレゼゴーネ（ロンバルディアにある山）を思わせるものがある。やがて、とあるそびえ立つ塔が（朝の鐘をひびかせて）、霧の黄金色のヴェールを引きさく。蒸気が白い綿屑のように、ひと筋の糸となって伸びて行く。影が薄くなる。しゅうしゅうという蒸気の音がはるばる丘陵の間まで届き、そのあたりで停滞している。そこから貧しい人びとのぎっしり詰まった、黒々とした雑踏が引き出され、作業場へ工場へ、あるいはまた小川のほとりの鍛冶（かじ）屋へとあふれ出て行く。

さて、そのスキャンダルであるが、たいした事態ではなかった。スキャンダルというより、むしろ不幸ともいうべきで、九月のマドンナもそろそろ近いころ、この辺では知る人もないある生地商人とルコネスの医者の手で発覚したのであるが、医者はその後、別荘住まいのさる軍医大佐から、より正確な資料を入手した。

ある日、まったく突然のことだったが、ペドロ・マー

ゴネスなる人物、つまりほかでもなくその地方を目転車でまわる夜警で、マンガノネスとかペドロという名で通っていた人物が、実はマンガノネスでもなければ、（より正確にいえば）マーゴネスでもなく、ましてやペドロなどではないということが広く一般に知られるにいたったのである。実は母方の大伯父の名前と姓を借用していたので、彼の本名はといえばガエタノ・パルムボであった。その二年間の夜警を通じて、なにがしかは世人ともども、名付け親でもないその大伯父の徳を長々とあがめてきたのであり、いやましに敬意を表すべく、その名と姓を世間にもちまわっていたのであった。そして感動するといつでも、おそらく、その男らしい微笑のかげに涙を半分ほど光らせ、大伯父の健康を祈ってちびちびやっていたが、その健康とは魂の健康、すなわち真実の、決定的な、永遠の健康、真に価値ある唯一のもの以外の何ものでもなく、またそれ以外の何ものでもあるはずがなかった。なにしろ、親愛な大伯父の遺骸はもう八年も地下に眠っていたのだから。

ところで、その大伯父が彼を育てたのであり、最初のうちのピエトロ坊主呼ばわりが、のちにペドロになった。世話になり、かわいがってもらい、見守られ、授乳してもらい（といっても、哺乳瓶でだが）、保護をうけ、教育をさずかり、相談にのってもらい、叩かれもした。いやはや、しかし、これも彼のためによかれとしたことで、事実、時として叩かれるだけのこともあったのだ……おしっこや、うんちまでさせてもらい、それからお尻を洗ってもらうといった具合で、この赤ん坊を相手にまさに子守り女であった。まったく息子とかわりなかったのである。

そういうわけで、涙も火酒も追憶のためとされたが、何よりもその地域のありとあらゆるたばこ屋で、ただでたばこを頂戴するのがいちばん多かった。

さて、この新しい名前は村人の間にも、別荘住まいの人びとの間にも、ある種の驚きをまねいたが、後者のある者は、《あの顔には何かがあった……》のにちゃんと気づいていた。まるまると、かっぷくのよい上半身、ぴったりふさがった制服の襟の上にブラシのような赤いちょびひげをたくわえ、小さいながらも鼻すじの通った大きな親しみのもてる顔がのっかっていた。目は落ちくぼんで小さく、きらきら輝き、くるくるとよく動き、視線には刃のきらめきさながらに鋭い火花がとび散り、帽子のひさしがそれをやわらげてはいたが、すっかり消してしまうまでにはいかなかった。頭から湯気も立てよとばかりに帽子を脱ぐと、額はきわ立ってみえるが頬骨よりも狭く、それがやや色あいを変えながら、禿げて白く、さらに真実の名誉にかけて清潔そのものの、ということ

はつまりかさばったものにせよ、練粉状のものにせよ、およそしみのたぐいがついていない頭蓋骨の丸天井へと後退していた。そういうとき、つまりひさしがなくなってみると、その目はただただ、あたりを圧するばかりで、何か求めるような期待するような表情で相手にせまり、相手はなんとしてでも何か法律による実質的な罰金といったものを払わなければいけないような感じをもつのであった。なにせ、法律とはそういうことを期待するものであったのだ。で、当然そのおかえしに受領証として薔薇色か空色の受取りをもらうのだが、これは上着の脇のポケットから異常なぐらいの自然さで取り出した控え伝票つきの帳面を破いたものであった。そのうえルコネス地帯ではだれもが、というか少なくともすべての人びとが、たとえ払うべきものは払ってあったとしても、暗闇のあの危険な見まわりを考慮してやるのが義務でもあれば善意でもあると思いはじめていた。そして結局は夜の長さ暗さとは無関係に、彼の双肩にになわされた責務の重要さ、微妙さをうのみにするまでにいたり、いまではだれもがそれを重要なものと思いこむようになっていた。というのも、南アメリカでは、ある人の名声とか役人の評判は必ずしもその職務の無駄さかげんで決まるわけではないからである。

この知らせはたちまちひろがって行き、スキャンダルの核心である当のマーゴネス＝パルムボは一九二五年にはちゃんと、部門としては最高といえる第五部門の第六級の年金を得ていたのである。それというのも、《なかに入って、引き裂く》榴弾の爆発で、耳が両方とも聞こえなくなっていたからだ。一三一高地の戦闘でのことだった。

このふたつの形容詞（《なかに入って》と《引き裂く》）は彼が村人の目くばせや、あてこすりを見て、やっとこれは出るところへ出されそうだなと感じたとき、ルコネスの人びとに負傷の話を作りなおして聞かせた際とっさに思いついたものであった。しかもそれを実に権威のある断固とした口調で話したし、軍服の助けもあって、時と場所を問わず話を聞いている人びとの唇に浮かんだ微笑を凍りつかせたものである。だれの目にももっともに見えたのだが、なるほど戦闘にはなかに入りもしなければ、ましてや引き裂くこともないふつうのあたりまえの榴弾もあるだろう（事実、彼らの兄弟たち息子たちがこれで殺された）。だがパルムボの榴弾はそれとは別で、特別の高性能の榴弾なのだ。それもひょっとすると、平日に百姓たちを効果的に殺すのには向いているあの通常のものよりはるかにおそろしい重火器から発射されたのだろうと、納得したのである。

榴弾のことをこういうふうに考えるほかなくなったの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo